慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	フッサールのカント観
Sub Title	Husserls Ansicht uber Kant
Author	山本, 万二郎(Yamamoto, Manjiro)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1958
Jtitle	哲學 No.34 (1958. 1) ,p.249- 276
JaLC DOI	
Abstract	Indem ich Husserls unmittelbare Darstellungen uber Kant in der Husserliana Bd. VI u. VII, insbesondere in den Beilagen des Bd. VII ausnehme, intendiere ich wenige Leitfaden zu gewinnen, um uber die Beziehung zwischen Husserl und Kant naher zu studieren. Husserl versucht erst zu zeigen, dass hinsichtlich des Problems uber die Moglichkeit der synthetischen Urteile a priori, Kant in die Irrtumer der Formalismus und Anthropologismus gefallen ist. Kant schopft den Grund jener Moglichkeit von der Gesetzmassigkeit der Formen der Sinnlichkeit und des Verstandes als des menschlichen Vermogens aus. Aber das beweist nicht die Wesens-Notwendigkeit der Urteile, sondern nur die psychologische Konstitution des Menschen, also die tatsachliche Notwendigkeit. Damit fallt Kant in den Relativismus und Skeptismus, ebenso wie Hume. Dann verwendet er seinen Blick zu Methodologie, und versucht zu zeigen, dass es gibt zwei Ursprunge der Erkenntnis, namlich logische und phanomenologische, und dass wir in der transzendentale Phanomenologie bis auf den letzteren zuruckkehren mussen. Um dort zu erreichen, mussen wir uns erst von dem empirischfaktischen Gesichtspunkte und dann auch von dem empirisch-transzendentalen enthalten. Denn beide sind noch naturlich. Dagegen muss der phanomenologische Gesichtspunkt echt transzendental sein. Dafur mussen wir die phanomenologische (transzendentale) Reduktion uben. "Transzendtal" besagt, von der "Aufklarung" der Moglichkeit der objektiv gultigen Erkenntnis zu handeln. Insofern ist die transzendentale Phanomenologie mit Kants Transzendentalphilosophie einig. Jedoch ist diese Einigung nur oberflachlich. Denn in Kants Theorie verwirklicht sich nicht genug die phanomenologische Reduktion, also auch nicht das Problem der Intentionalitat. Nur dass die transzendentale Deduktion in Kants K. d. r. V. I. Aufl. es andeutet, wenn auch verworren. Summarisch zeigt Husserl die guten und schlechten Grundzuge in Kants Philosophie. Einmal als schlecht; 1. Kant fordert den absoluten Boden. Doch hat er zwei Voraussetzungen: Anthropologismus und Naturwissenschaft. Also verdient er nicht seine Forderung. 2. Durch die dogmatischen Voraussetzungen fallt er in den Psychologismus. 3. Also ubersieht er die wahre Bedeutung des Apriori. Zum andern als gut; 1. Kants Philosophie ist besser als er selbst weisst, weil sie gewaltige Entdeckungen und echte Einsichten in sich beschliesst. 2. Eine von ihnen liegt in der Gliederung des Werkes, in seiner Scheidung von Asthetik, Analytik und Dialektik. 3. Entdeckung der Intentionalitat und Synthesis, wenn auch nicht genug. Sofern Kant als erster schliesslich die groberen Strukturen erschaut, bildet er ein Ubergangsglied zu der neuen Phanomenologie.
Notes	小林澄兄先生古稀記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000034-0249

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

フッサールのカント観

山本万二郎

一　はしがき

本論に於てフッサールとカントとの関係について全面的に考察しようとするのではない。寧ろその一歩手前の段階であつて唯フッサールがカントについて直接に叙述してゐる点を摘出して、フッサールのカントについての見解を見、両者の間に関係があるか否か、若しあるとすればどの様な点に於てあるか、について明らかにするための手掛りを得たいと思うのである。この目的のためには、固よりフッサール自身の直接叙述にのみ限る必要はなく、寧ろそれ以外の叙述に求める所が多々あるであろう。又直接叙述だけでも殆んどフッサールの全著作に渉つている。しかしこゝではフッセリアーナ第六、七の両巻に於ける直接叙述にのみ限り、その他の場合はそれに関聯して瞥見するに留めたいと思う。直接叙述に限つたのは、それが両者の関係について何ごとかを言い得べき源泉であると思うからである。又その両巻を選んだ一つの理由は、その両巻に於て特にカントに関する直接叙述が多いと思われる

からであり、もう一つの理由は、その両巻の本文のみならず附録をも見ることによって、フッサールの思想発展の大体全期間に触れることが出来ると思われるからである。(註1) 即ち第六巻は一九三五―六年の作、第七巻は一九二三―四年の作があるが、特に後者の附録にはカントに関するものが多く、その年代も一九〇三年から一九二四年に渉つている。(註2) 従つてこれが本論の主材料となる。

註1　尙その他第六巻 (Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendentale Phänomenologie) は晩年の代表作であり、それは第七巻 (Erste Philosophie, I., Kritische Ideengeschichte) と共に彼の全著作の中哲学史的考察に触れた唯一のものであることも、両巻を選んだ理由として挙げられるであろう。

註2　第七巻附録の中本論にて採り上げられるものは次の通りである。

Hume und Kant: Einwände gegen Kants Problem der synthetischen Urteile a priori und gegen das Schema seiner Lösung, 1903.

Hat Kant wirklich das Grundproblem der Erkenntniskritik getroffen? 1908.

Gegen Kants anthropologische Theorie, 1908.

Zur Auseinandersetzung meiner transzendentalen Phänomenologie mit Kants Transzendentalphilosophie, 1908.

Kants Begriff des Faktums (der Tatsache), 1908.

Kant und die Philosophie des deutschen Idealismus, 1915.

Zur Kritik Kants und Leibniz', 1924.

Kants kopernikanische Umdrehung und der Sinn einer solchen kopernikanische Wendung überhaupt, 1924.

Kant und die Idee der Transzendentalphilosophie, 1924.

最後の二篇が独立論文で、その他は何れも覚え書である。

尙思想発展的に見て以上の諸篇及び本文等を、第一時期（一九〇三―八）、第二時期（一九一五）、第三時期（一九二三―四）、第四時期（一九三五―七）に分つことが出来よう。この点については、フッセリアーナ第一巻の編者スト

ラッサーの序文参照。フッセリアーナ全集からの引用はすべて、巻数と頁数のみを挙げる。

二　形式主義と人間主義

最初の二論文、一九〇三年「カントに於ける先天的綜合判断の問題とその解決仕方への反論」と、一九〇八年「カントは実際に認識批判の根本問題に当つたか」は何れもカントの先天的綜合判断の可能性の問題に関して論じ、(註)而してその問題に関するカントの所説の形式主義と人間主義の誤謬を指摘しようとしている。

註　第二論文もその初頭に於て、「カントが先天的綜合判断は如何にして可能なりやという彼の問題を以て、認識批判の根本問題に、どの程度に実際に関与したかについて考察しようと思う」と述べている。(VII 377)

さてフッサールによれば、カントがその問題を折角提出し乍ら、問題の解決仕方が極めて単純且つ外面的であつたのは、先天的綜合判断の原理を形式としてとらえた所にある。而してそれはヒュームとライプニッツに関するカントの見解に基づく。即ち一方ヒュームに於ては先天的な法則と言われるものは観念の関係乃至形式に外ならないのであるが、その際先天的認識と分析的認識とが同一視されている所から、カントは先天的認識乃至分析的判断の可能性の問題は、観念の形式の最高のものとしての矛盾律なる形式原理の問題に帰着すると外面的に解釈した。(註1)それに対応して先天的綜合判断の原理も形式であると外面的に考えたのである。(VII 353-4) 又他方に於てライプニッツの「知性自身」の仮定に従い、精神が純粋に自己自身から汲み出す所の、而して外からの刺戟に基づかない所の、概念があること、而してこの概会から打ち立てられる所謂先天的法則は、純粋に精神の内在的な本質に属する

法則性を表わすものであり、それが無制約的に客観的に妥当するものであると解した。(註2) かゝる見解を土台としてカントは、感覚与件は感性と悟性の根抵的機能の形式に従つて形成されると解し、ここに形式説(註3)が生れたのである。(VII 379)

註1　これが誤りであることについては、(VII 354).

註2　これが誤りであることについては、(VII 379, 381).

註3　形式主義といふ批判は、機能の形式という事ばかりでなく、かゝる能作の地盤となる意識それ自身も、豊富な具体的意識ではなくして、形式としての意識一般としてとらえられている点にも、適用されるであろう。(VII 399)
而して「外面的に」とは、この様な深い所まで掘り下げていないことを意味するであろう。(VII 228, 377)

それでは先づかゝる形式説は何を意味し、何を結果するであろうか。元来形式として解すること自身があらゆる意味で誤りであるのではない。それを感性や悟性の機能の形式と解する所に問題がある。(註)

註　蓋し一般に法則を所与の真理として把握する場合には、法則は観念の関係という形式に於てのみ与えられ得るという事、即ち概念内容が明証的に体験され、かゝる概念内容の普遍的本質に、かく〳〵の関係が不可分に属してゐる事を洞見する事は、疑いなきことである。(VII 353)
唯注意すべきは観念の関係といふ時、それを心理学的に解しないことである。(VII 359)
矛盾律の如きもこの様にして洞見されるべきものである。(VII 354)
更にかゝる形式としてのアプリオリには、矛盾律の様な純粋論理的判断乃至先天的形式的判断のみならず、先天的実質的判断もある。(VII 352)

即ち一方カントは認識の基礎を、心理作用の単なる経験的学問としての心理学におくことを、正しくも回避した。それにも拘らず他方カントの形式説には一種の心理学が附着している。蓋しカントに於ては、たとへ個々の人

間、個々の民族、個々の種族ではなく、人間一般についてではあるとはいえ、あらゆる人間知性の本性に或る機能の形式が属していて、その形式の合法則性が普遍妥当性を有してゐると解するからである。(VII 354)

この様に解する以上、ヒュームが習慣説をとるのに対し、カントが、たとえ習慣とは異るその他の原理にせよ、習慣と同様に主観的に普遍的な人間的経験形成の原理を導入する限り、根本に於てヒュームと異る所がないであろう。(註) 更にカントに於ては、元来人間認識は現象的意味しか有しないのにも拘らず、絶対的意味を要求するのは、自己矛盾である。(VII 308)

註　人間にとつて妥当であるということは、真に客観的な絶対的妥当ではない。(VII 355)

かくて形式説は、人間主義心理主義を意味し、(註) 相対主義懐疑主義を引起し、自己矛盾に陥入るのである。

註　カントが心理主義であるといふ批判は、既に「論理研究」(Logische Untersuchungen, 1913) 第一巻 (九三頁脚註) に見られる。而してこの批判は人間主義の批判と共に、フッサールの終始変らぬ所である。但し心理学については、後に見解の変更がある。(VI 265 ff., 312-3)

次にこの形式説は、カントの問題 (無仮定的な根本学の建設) の根本的解決に対して、何の役をしたであろうか。元来カントの所説は心理学の問題であつて、根本的な認識論上の問題ではない。従つてそれは何ごとをも証明していないし、又それ自ら証明されてもいない。今仮りにカントの知性自身の説と形式説とが正しいとしても、その説く所は、唯認識に於ける人間構造が、その様な心理学的構造を有していることを示すだけである。(VII 379) しかもそれはいまだ直接所与としての現象ではなく、従つて仮定に外ならない。(VII 380) 蓋し心理学的事実は心理学自らと共に超越的であり、従つて先づかゝる超越的認識の可能性が先決問題となるからである。

要するにカントはそこで心理学的必然性と認識論上の必然性を混同したのである。(註) 而してカントの説く所は、事実の必然性事実の問題であつて、事実の本質に関することではない。(VII 381)

註　二つの必然性について (VII 357-8, 364)

それでは最後にかゝる誤りから救われるためにはどうすればいいか。そのためには先天的という事の意味を深く堀り下げて見なくてはならぬ。即ちそのためには特殊な人間精神の本質にのみ属することではなく、いかなる存在者でも判断し認識しようとする場合、思惟及び認識一般の本質に属することを明らかにしなくてはならぬ。(註1) 即ち心理学ではなくして根本的な認識論の立場に立たねばならぬ。それは絶対無仮定的に行う場合のみ可能である。而してその立場は絶対所与の無仮定的領域内に於ける現象の志向的本質的考察に外ならぬ。(VII 377-8) それによつて始めて自我及び外物の真の存在の意味が明らかとなり、思惟作用乃至主観性の二重性も明らかとなり、(註2) 更にそれによつて一方思惟作用の法則であるべきであるにも拘らず、他方思惟法則が客観的に妥当する存在一般の可能性の制約であるべき理由(註3)も明らかとなる。(VII 389)

註1　カントは断言命令に於てかゝる点に触れていると解している。(VII 355)
註2　主観性の二重性について、或は主観の客観化について (VI 115, 205)
註3　可能性の制約の問題について (VII 386)

三　空間とアプリオリ

一九〇八年「カントの人間主義に反対して」に於ては、前論文に引続き人間主義の誤りを指摘し、その立場からアプリオリの一つとしての空間を採り上げ、先験的感性論の意味を論ずると共に、一方物自体と原型的知性の問題に論及してゐる。而して何れもアプリオリの意味を明らかにしようとするものである。

1　空間直観の先天性

a　空間形式の根拠　カントは空間形式を人間主観的に解釈し、あらゆる感性的質料を空間形式によつて秩序づけるのは、人間主観性の根本的特性であるとするのであるが、空間形式は元来かゝる人間主観的のものではなくして、明証的必然的に洞見されるものである。即ち何らか直観的に与えられるものに於て一切の感性的性質も空間的形態も変容するが、かゝる変容される偶然性に対して一つの必然性が存するのを見る。即ちかゝる変容一般の中に於て尚同一のものを保持する限り、それが必然性である。従つて今の場合変容の中に、感性的性質の附着した空間形態を保持する。この様にして必然的形式乃至形式的本質、或はその下に一切の変容を含む最高類がとらえられるのである。これが必然的に物一般に属し、その他のものが変容するにも拘らず私はそれによつていつも一つの物を保持する。即ちそれは物の本質に属するのである。尚かゝる空間形態は、先づ感性的性質に規定されている空間であり、それも亦変容するが、かゝる変容にも拘らず、更に同一としての普遍的空間に組み入れられる事を洞見する。(VII 357) 結局アプリオリとしての空間形式は、物の本質であつて、人間の直観能力に基づくものでなく、洞見されるものであつて、直観内容の中から抽象によつて生ずるものとしての純粋直観ではないのである。

b　二つの必然性　洞見される必然性とはその反対が考え得られないということであり、その考え得られないと

いうことは、それを避ける直観を形成することが出来ないことであり、単にそれがそうであつて、それ以外であり得ないという意識ではない。即ち偶然的不可能ではなくして本質的不可能を意味する。従つてそれは人間主観の直観能力に関する限られた事実上の不可能とは異る。(VII 357-8, 381) 即ちそれは本質的必然性である。

c　方向づけるもの　カントは、幾何学に於て我々は純粋直観に方向づけられるという。然し今問題となるのはかゝる抽象(註)ではなくて、変容によつても妨げられないものの固持であり、方向づけるものは純粋直観ではなくして、前述の様な必然性の洞見であり、しかもかゝる洞見は人間性の形式とは無関係である。(VII 358)

註　主観的抽象について (VII 402)

d　感性論の結末　かくてカントの様に空間形式を人間主観の特性とする限り、その普遍性も事実上の普遍性に留まる。従つて丁度ヒュームの感覚主義がそうであつた様に、カントも人間主義に立つ限り、幾何学を基礎づけることが出来ない。(註1) これが感性論の結末である。(註2)

註1　幾何学の不可能について (VII 403)

註2　感性論の真の問題は、幾何学的空間ではなくして、具体的な特殊な空間形態である。(VII 223, 388)

結局カントは合理主義を批判しようとし乍ら合理主義的偏見に従い、分析判断のみを真の意味で合理的判断とし、その他の綜合判断を事実に還元して懐疑論に陥入つたのである。(VII 360)

e　解決　ここに於て問題を真に解決するためには現象学へ帰えらねばならぬ。そこに於て可能なる自然も可能なる意識の相関として考察され、又自然についてと同様に数学に対しても、それについての意識が如何なるもの

か、そこに於てそれらがいかに構成されるかを考察しなくてはならぬ。但しその意識とは人間意識ではなくして先験的意識であり、個々の偶然的意識ではなくして「意識一般」[註1]としての意識である。正確にいえば真の意味での合理的な[註2]全く洞見され得る又理解し得る本質必然性を研究するのである。(VII 361)

註1　意識一般について(VII 227, 256, 257, 390, 393)

註2　真の合理性について(VII 402)

2　物自体の不合理と原型的知性

カントは神に対して原型的知性(Intellectus archetypus)を許したが、人間には模写的知性(Intellectus ectypus)しか許さない。従つて神にとつては経験的綜合的認識と先天的綜合的認識の区別はないが、人間にとつては法則の一群については神の如くであるが、個別的のものについては常に受動的である。しかしかゝる区別は全く基礎のない形而上学である。神にとつても人間にとつても経験的真理と非経験的真理、事実的真理と合理的真理、分析的合理的真理と綜合的合理的真理との区別は妥当する。何れにとつても判断は個別的か又は純粋可能に関するかであり、後者は前者に対して本質法則を以て指令する(vorschreiben)[註1]ものである。本質的法則本質関聯に関する判断こそ先天的判断であるが、かゝる本質法則即ちアプリオリは神も創造することが出来ない。[註2](VII 362-3)

註1　指令するについて(VII 399, III 350)

註2　神の認識について(III 98 f.)

若し物自体があるにしても、それも亦対象として本質法則に従う。しかも論理的形式的法則のみならず、領域の

法則にも従う。それ故分析的及び綜合的法則がそこに妥当する。(註)

註　分析的と綜合的との区別は、フッサールに於ては、形式的本質法則か、実質的本質法則かの区別である。(Ideen, § 16)

而して神はかゝる物自体に対して、我々が事物に対すると同様に、個々の対象に対しては受容的であろう。たとえこの様に物自体を認めるにせよ、物自体は本質の世界ではなくして事実の世界以外のものでない。而して今や個別的受容的認識があるとすれば、その背後に再びその基準として物自体を求めなくてはならないであろう。かくて無限遡行の誤りに陥いる。

要するにかゝる誤りの源は、前述の様に先天的綜合判断を事実上の人間主観性の根拠に基づくものと解し、主観性に於ける質料を除いた限りの「先天的」認識と真の意味での認識の先天性(註)とを混同したからである。(VII 364)

註　二つの先天性について、(VII 357-8, 381)

尚物自体に関し、ヒュームは印象と観念とを出発点とすることによつて、カントの様な物自体の困難を持たなかつたことを指摘し、認識は所与と共に始まるのであり、所与とは直接体験であると解している。(VII 352-3) これはカントが質料から形式を抽象するに当り、外から触発するものとして外物（物自体）の存在を自明的としたこと(VII 379) に対する批判である。

四　自然的立場と現象学的立場　方法の問題　一

一九八〇年「私の先験的現象学とカントの先験的哲学との対決」に於て方法の問題が論ぜられる。(VII 383) 即ち以上三論文は何れもアプリオリを先天的綜合判断の可能性の問題に関して明らかにしようとしたが、その考察は更に進んでカントとフッサールそれ〴〵の立場なり方法なりの異同について論究しなくては、アプリオリの深い意味は明らかにならない。かくて方法の問題が採り上げられたと解し得よう。

a　二つの起源　フッサールによれば、私の先験的方法は先験的現象学的方法である。それは認識の妥当の究極の意味を「根抵」に戻つて研究しようとするものである。

認識の起源に戻るということは二つの段階に分たれる。その一つは論理的起源であり、論理的究極原理に戻ることであり、厳密科学(註)に戻ることであり、それは豊富な客観的論理学への途である。

註　この厳密科学は「論理研究」第一巻に於ける純粋論理学を意味するであろう。而してこの起源の求め方は本質的還元に通ずるであろう。

次に更にその起源に戻ることであり、それはかゝる原理に於て言い表わされた客観的なるものの構造の先験的現象学的研究に戻ることであり、先験的主観性に於ける客観性の起源、或は客観なる相対的存在の絶対的なるものからの起源を求めるのである。(註)

註　絶対的のものとは現象学的純粋意識である。従つてこの方向は現象学的還元に通ずる。

前者はあらゆる原理的基礎であり、換言すれば種々の基礎の種別と客観的論理的結合の原理であり、後者は意識の仕方（意識の本質）とそれに属する本質法則である。(註)

註　前者はノエマ的であり、後者はノエシス的であるといえよう。尚これについて遡行の二方向（VII 371 ff.）及び反省の二義（VII 266 ff.）参照。

かゝる先験的現象学的方法については、カントも新カント学派も全く予感さえもしなかつた所である。（VII 382）それではかゝる方法に対し、カントの先験的方法は、どの様な立場にあるであろうか。

b　三つの立場　先づ先験的な様子を持つ後天的な—経験的立場の—問題がある。例えば世界が人間認識に近づくためには、世界はいかなる性質のものでなければならないか、或は更に進んで（但し前現象学的立場に於て）世界が自然科学的認識に近づくためには、世界はどの様でなければならないか、という問である。

この問を逆にいうならば、認識に於て世界が認識され得る（但し科学的に認識され得る）ためには、認識はいかなるものでなければならないか、換言すれば、或る存在者にとつて、自然の学問が可能であるためには、或る存在者はいかなる組織を有していなければならないかとなる。

これらの問は何れにせよ、人間認識という場合、既に人間及びそれと共に「世界」を指示している。而して人間の心的生命が世界と関係し、心的生命が一定の仕方と形成とを有しなければ、世界の現象はあり得ないことを意味している。而してかゝる世界の認識には動物より人間へ、又人間の中にも種々の段階(註)があろう。結局それらは自然科学の問題であり、そこに心理学や生物学が成立する。（VII 383-4）

註　段階について、（VII 391-2）

かくて以上は経験的考察であり、心理学的な経験法則の考察であり、かゝる立場に立つ限り経験的制約が変更さ

れゝば、いかなる認識もあり得ないことになろう。(VII 385)

次にかゝる経験的立場に対し、現象学は認識の本質的仕方とそれに対応してそれらの中に構成される世界とを見るのである。但し以上の様な純然たる経験的立場に対し、経験的なるものへの先天的なるものの移行、或はかゝる人間認識の事実にのみ移行し得る本質を問うことが出来る。これが経験的先験的研究である。(註)

註　経験事実本質の関係については、(VII 234, 237, 365, 390)。ここではいまだ経験と事実との区別は明らかでない。

しかしそれが経験的である限り何れもいまだ自然的立場である。かくて最後に真の先験的研究乃至先験的現象学は、かゝる経験的立場を去らねばならぬ。(註) 蓋しそれが経験的である限り、哲学的には何も学ぶ所がないからである。勿論人間認識の問題も哲学的側面を有している。しかしそれは認識論的側面即ち「第一（最初の）哲学」ではなくして「最後の哲学」に属する側面である。(VII 385) 先天的なるものは先験的現象学に於て見出されるものである。(VII 386)

註　現象学の二義について (VII 236-7)
　　先験性の二義について (VII 256-7, VI 212)

c　批判主義の先験性と先験的現象学　それではかゝる先験的現象学と批判主義の意味に於ける先験的問題とはどの様な関係にあるか。若し先験的という意味を一般的に解すれば、客観的に妥当する認識の可能性の「解明」が論ぜられる。而してその客観的に妥当する認識とは、一方認識として「主観的」であり、他方「客観的」存在即ち主観に独立の存在自体に関係するものである。但しそこでは学問のあらゆる根本的類型（自然科学、数学、純粋論

理学等）に於ける客観的に妥当する認識の可能性について、それ〴〵対応する解明が論ぜられる。それ故いかにして自然科学的形式に於ける客観的に妥当する認識は可能なりや、又客観的に妥当する幾何学はいかにして可能なりや等が問われる。かゝる「先験的」という概念を根抵におけば、先験的現象学は真の先験的哲学であり、「先験的」[註1]という名称に値する。何故ならば先験的現象学はかゝる問題をすべて解決するからである。[註2]

註1　「先験的」の意味について（VII 282, VI 100 ff.）

註2　ここに可能性の制約の問題がある。（VII 379）

d　志向性の問題　カントは右の問題の解明に当つて、主観性に於て或は主観性と客観性との対応に於て、認識によつて認識される客観性の意味の究極の規定を求めた。その限り我々はカントと一致する。

しかしこの一致は外面的に過ぎない。カントは正に認識と対象性との間の対応の真の意味に迫らなかつたし、又「構成」（Konstitution）という特に先験的な問題の真の意味にも迫らなかつた。[註1][註2]

註1　志向性について（VII 387, 404）

註2　構成について（VII 390, 395）

構成の不十分さについては、カントが時間と空間とを「感性形式」として幾何学の可能性を証明したと信ずる先験的感性論に於て既にあらわれている。即ちカントがそう信ずるにも拘らず、単なる「感性」の内部に於ては、或は我々の意味に於ける現象以前には即ち先験的分析論に於て始めて―全く不十分乍ら―取扱う所の「綜合」以前には、空間性の構成について何も示していない。[註1]即ち我々の意味するものは、幾何学的空間ではなくして、単なる知

覚の空間即ち幾何学の前提である所の単なる直観の空間のことである。(註2)

註1　経験判断も結論では問題とはならず、分析論で始めて問題となることを指摘している。(VII 380)

註2　知覚の空間性について(VII 212-3; 223)

かゝる空間からどの様にして幾何学的空間が成立するかが構成の問題になる。(VI 21 tt.)

次に分析論に於て、特にその先験的演繹及び原則(殊に「類推」)の証明に於て、もう一つの特殊な先験的方法が表われている。即ちここに於て可能性の制約が追求され、そこに対応が暗示されている。

「類推」とはあらゆる経験に先立つて妥当する先天的に妥当する命題である。蓋し若しそれが妥当しなければ、客観的に妥当する時間規定が不可能になるからである。即ち経験科学の形式に於ける経験が可能であるべきならば、それ故経験科学的意味に於ける自然が認識されるべきならば、かく〳〵の命題は妥当しなくてはならぬ、というのである。(VII 386)

範疇についても同様である。即ち対象性が思惟する認識によつて科学的に把握されるとすれば、現象する対象は思惟の制約に従つて存在しなくてはならぬ。而してかゝる対象はそれによつて概念的に把握される所の形式をそれ自ら担つてゐなくてはならぬ。かゝる形式が範疇である。

しかしここに於ても直観と直観されるもの、意識の様相としての現象の形式と現象する対象性の形式との間の明瞭な区別が欠けている。而してその欠除は本来現象学的である所のものが見られていないという事、或は先験的演繹が非常に混乱しているという事(註1)、而して先験的統覚が非常に多くの秘密を持ち(註2)非常に不可解な役割をしている事を意味する。(VII 387)

註1　第一版の先験的演繹については、(VII 228, 237, 281, VI 106, 455)。
更に「イデーン」に於て次の如く述べている。即ち例えば「純粋理性批判」の第一版の先験的演繹は、本来既に現象学的地盤の上に動いている。しかしカントはその地盤を心理学的地盤と誤解し、従ってその地盤を自ら再び棄てたと。(II 148)

註2　秘密乃至神話について(VII 117, VI 117, 206)

五　先験的方法と現象学的還元　方法の問題　二

かくてカントの立場は先験的現象学の立場に対し、いまだ不十分なものであるが、前記論文の第二部は「現象学的還元に於けるカントの先験的方法の価値内容」と題し、更に両者の関係を論じている。

a　現象学的に見られた感性論と分析論の問題　カントが範疇の演繹の要求に於て、特にその緒論の部(註1)に於て述べている価値多き思想は次の事を意味する。即ち若しそこに於て我々があらゆる「能力」即ち現象学的に重要ならざる一切のこと而して純粋に認識論的な問題を混濁せしめる一切のことを除去するならば(現象学的還元を行うならば)、対象性と認識との純粋なる対応が眼前に来り、而してかゝる対応の本質を我々は純粋に内在的且つ本質的に(この意味で先天的に)研究することが出来るということである。今や我々は自然対象性事物感性界を考慮するのであるが、かゝる対象性の本質には無制約的な普遍性と必然性とに於て或る規定が属している。即ち空間時間質料運動変化という規定は正にその本質に属している。我々はかゝる対象のアプリオリ(存在論的アプリオリ)(註2)を今や認識の問題として考慮するならば、本来の認識領域に於て直観と思惟即ち先験的感性論と先験的分析論とが分た

れる。(VII 387-8)

註1　ここに緒論(Einführung)というが「純粋理性批判」の範疇の演繹に関する部には緒論はないので、先験的演繹論第一版第二節、第二版第十五節以下のことであろう。

註2　存在論的アプリオリについて(VII 224, 227, 280-1)

従つて我々は真の先験的感性論の問題として、次の様な問題を有している。即ち対象は直観に於てどの程度に構成されるか、対象は直観に於て如何なるものとして又どの様な仕方で現われるか、対象は直観に於てどの様な仕方で構成されるか、又対象がそこに於て与えられる知覚系列や記憶系列はどの様なものか。

次に真の先験的分析論の問題として次の様な問題がある。即ち対象は「悟性」に於て如何なるものとして又どの様な仕方で構成されるか、対象は思惟に於てどの様なものとして妥当するか、思惟は対象を自然そのものの内部に於てどの様に規定するか、自然は「精神」乃至経験的主観と同時に本質上どの程度に構成されるか。

以上のことは正に先験的現象学の問題である。(註)

註　この問題の区分について、フッセリアーナ第一巻「デカルト的冥想録」(Cartesianische Meditationen, 1950)六十一節一七三頁及び「経験と判断」(Erfahrung und Urteil, 1948)第一節と第二節との区分の仕方、更に一九二四年「カントのコペルニクス的転回」に於ける感性論と分析論との区分仕方をも参照。

b　アプリオリと事実　今ここに右の問題を展開しようとするのではなく、カントの先験的方法と関係のある次の言葉を考察しよう。それによつて事実とアプリオリとの関係が明らかになろう。カントによれば、直観は思惟の制約に従わねばならぬ、さもなくば直観は思惟に従つて把握されることは出来ないであろうし、又直観は、現実乃

至自然の事物として考えられ而して客観的に妥当なりと規定される所の、事物をそれ自らに於て現象せしめることが出来ないであろうと。(VII 388)

この事は次の事を意味している。

i　事実的なものから先天的乃至本質的なるものへの移行　即ちカントの右の見解の中に於て純粋に先天的なるものを取扱うことが出来る。蓋しそこに於てカントは単なる感覚を以てしては即ち統覚なくしてはいかなる自然も構成されないことを述べているが、それを現象学的本質関聯として見れば明らかに承認し得ることであつて、単なる感覚はいまだ認識とならず、対象は同一性の意識によつてのみ可能であり、しかも意識と自然との対応の本質には、意識の本質形成と共に自然も亦構成されるということが属しているからである。しかしこの事は事実上そうであるのではなくして、理想的可能性であり、本質法則上そうなのである。(VII 389)

カントはこの点を見落した。カントは先験的考察に当つて、事実的と先天的とを混同し、現象学的アプリオリを知らなかつたのである。逆にいへばカントの見解も現象学的に還元して見直せば、承認し得る点を有しているのである。

ii　本質乃至アプリオリから事実への移行　iと逆の方向をとつてかゝる現象学的アプリオリを事実的意識に移行する場合、一種の事実性(Faktizität)が考慮される。それは事実的意識であつて経験的意識ではない。(註1) 勿論経験的意識にも移行し得るが、方法の純粋性のために絶対的なものに還元するのである。事実的意識は現象学的還元の下に於ける一定の限定された意識の経過である。而して本質法則は自明的に、一定の絶対的意識一般に対する可能性を限界づけるが、それは事実的意識の無限に多くの事実、無限に多くの状態に対しては解放的である。(註2) (VII

390)

註1　経験事実本質について（VII 256-7, 365, 385）

註2　意識一般について（VII 257, 361, 393）

iii　理念としての一つの自然—事実についてのアプリオリ　先験的現象学は、自然の可能性と、自然（可能なる自然、自然一般）の構成（Konstitution）[註1]に対する意識の本質可能性を考察する。しかし今や事実的意識に関し、先天的（先験的）見地の下に於て、次の様な新らしい考察が開かれる。即ち自然は事実であり、それには絶対的な事実的意識の経過が対応し、自然はかゝる意識の経過の中に於て事実的に構成される。（VII 390）自然の構成については意識と自然と何れの側にも段階がある。[註2]対象側についていうならば、統一なき多様としての事物の世界、統一は有するが偶然をも含む自然、精密な法則の下に於ける最も普遍的な意味での自然乃至自然一般である。その際一つの自然は事実的にいえば現実的な自然である。しかし現象学的にいえば種々の可能性が許される。従つて意識に対して一つの自然即ちいつも同じ自然或はいつも変らぬ自然というものは存しないことも可能である。（VII 392）若しそれがあるとすれば、それは科学の相関であり、学問の構成であり、一つの理念である。[註3]而してこの事の成立する根拠は、あらゆる事実的意識の経過が一つの包括的意識[註4]に秩序づけられて考えられ得るという所にある。而してこの包括的意識に於ては一切のものが合理的調和の下に必然的に融和する。かくて意識の本質には、それ自らの中に於て必然的に一つの自然を構成することが出来るといふことが属している。（VII 393）

註1　フッサールは Konstitution（現象学の場合）と Konstruktion（その他の場合）とを使い分ける。（VII 197-8, 395, 402, III 133-4）但し訳語をそれ〴〵に一定させるのは困難である。

註2　段階について（VII 383）
註3　理念について（VII 274, I 97, III 202, 351）
註4　包括的意識（意識一般）について（VII 257, 350, 383, VI 115, 275）

要するにカントの先験的方法はいまだ経験的立場にあり、現象学的還元が行われねばならぬ段階にあることを示すものであろう。而してアプリオリに関してカントが現象学的アプリオリを知らなかつたという事は、単に事実的なるものに対して本質を知らなかつたという事のみを意味するのではなく、ノエマ側に対するノエシス側の本質、即ち狭義の或は本来の現象学的本質が知られなかつた事を意味するのであろう。従つてカントの先験的方法は、前述の二段階の起源に関し、たとえ第一段階の論理的起源（それもカントの場合事実的領域にあるのだが）には戻つても、更にその起源としての純粋意識には達しなかつた事を意味するのであろう。

尚フッサールは経験的と事実的と本質的とを分け、カントがこの第三段階に到達しなかつたという事は以上の如くであるが、（但し後年の論文に於て、カントもそこに関与していることを述べている。VII 197, 237）それでは全く第一段階にのみ留まつたのであろうか、又第二段階にさへも関与しなかつたかということについては、フッサールは何も明言していないが、(註)その点については同様に一九〇八年「カントに於ける事実の概念」なる論述に於て、カントが自由の理念を事実（Faktum）と解し、経験概念を拡大したと述べている（VII 365）ことを指摘しておこう。

註　この点については、VII 237, 256-7, 390

又更に第三段階本質に関しても、既に前述の如く断言命令を以て人間主義を超えるものと解した（VII 355）ことを再び指摘しておこう。

しかし最初の三論文に於ては、カントに対し全く批判的でのみあつたといえるであろうが、この論述（方法論に関するもの）に於ては、固より以上の様にカントとの相異点をも明らかに指摘しているが、両者間に少なくともその意図に於て相触れる点のあることが指摘されている。一九〇八年というのは、一九〇〇年「論理研究」公刊に際し、ナトルプの批判によりフッサール自身カント解釈の浅薄なのを悟り、且つ自己の思想打開に苦心して、カント及び新カント学派の一層の研究に志し、一九〇七年「現象学試論」をその成果の一端として講述したが、現象学的還元及び先験哲学としての現象学という思想をその頃より持つ様になつたといわれる時期である。(註)

註　Bd. II, VIII, Bd. VII, XVIII-XX（各編者の序文）

六　感性論と分析論　その長短両所

一九一五年「カントとドイツ観念論の哲学」なる論述は、以上五論文の概括的な位地にあるといえよう。即ちその主文に於てカントの感性論と分析論とを解釈叙述した後、それに対する批難を三点に要約し、最後にカント哲学の現象学への寄与に言及している。

尚感性論と分析論については、本論文の外に、一九二四年「カントのコペルニクス的転回」なる論文に於ても叙述されている。但し本論文に於ては比較的カントの祖述に近く、後者に於ては、前節に現象学的に解されるべき感性論と分析論の構図が示されたが、その様な観点からの解釈が濃厚である。従つてその叙述は後者に譲り、本論述については、その要点と特に注意すべき点のみを挙げておく。

一　感性論と分析論

先験的感性論に於ては、物自体に実在的性質としての空間を帰属せしめる事は、何等の支持なしに、我々の主観性と現象とに属する形式の二重性を物自体に誣いるものであることが指摘されている。而してカントは空間についてと全く同様に時間についても、それが数学的学問の基礎であることを主張する。更にかゝる学問の可能性とその客観的妥当性の可能性とは、時間が人間の直観形式であり、又一切の対象的な時間的存在は人間主観性の中にその形成の根源を有するという先験的構造（Konstruktion）に基づくと解するのである。（VII. 395）

先験的分析論はそれと同様に、純粋な自然科学の先天的法則に対して二重性の問題を解決しようとするものである。それは最高原則の導入によつて行うとするのであるが、要するに純粋自然科学の先天的綜合的判断は如何にして可能であるかという問は、次の様に答えられる。即ちその判断は、たとえ純粋悟性に起源を持つとはいへ、しかも必然的に自然について妥当する。蓋し自然は決して悟性支配以前に与えられる存在自体ではなくして、寧ろ自然はそれ自ら、直観と悟性による形成に於て構成される自然に外ならないからと。かくて経験的悟性の世界はいはゞ形式としての純粋悟性を自らの中に隠している。純粋な悟性の法則は与へられる自然に従つて方向づけられるのではなくして、悟性は感性の土台の上に自然を自ら形成する限り、自然に自己の法則を指令する（vorschreiben）[註1] 所のものである。従つて自然科学は意識に無関係な物自体の意味に於ける自然の学問ではなくして、経験されたる自然の学問であり、経験されたる自然とは直観と悟性との支配の中に綜合的に構成されたる所の我々主観性の形象である。かくて学問の客観性は先天的に基礎づけられた必然的主観性に等しい。この主観性は各人間自我に属する止

揚し得ざる形式である。[註2] これがカントの「先験的」観念論＝[註3]経験的実在論の意味である。(VII 399)

註1　指令について (VII 363)

註2　形式としての主観について (VII 399)

註3　観念論について (VII 280, I 118)

尚注目すべきは、統覚の綜合の解釈に関して、相互主観性が導入されていることである。[註] (VII 397)

註　これについては、後の「カントのコペルニクス的転回」の論文参照。

二　短　所

以上の解釈の上、次の三点を批難している。

1　カントの経験認識の理論についての批判

カントは自ら先験的哲学を究極的意味での批判と解し、独断論と争っているが、カントは人間主義と自然科学との二つの前提を有している。従ってその主張に価しない。(VII 400)

元来超越の問題は、純粋意識の土台の上に於て見られなければならないのに、それを人間主義の立場に留めて考察した。

又自然科学から出発すること自身は差支えないが、それを絶対的地盤まで掘り下げなかった。

要するに現象学的還元をせず、純粋意識に於けるノエシスノエマ的研究を見なかった。

2　カントの独断的前提

以上二つの理由は結局心理能力としての人間主観の前提に帰着する。而してその前提が研究の進行及びその成果に於て必然的なしかも不明瞭な推移（意味の転換）を引起している。それ故この前提は現実的な哲学的学問としてたえられない様な神話的意味[註]を持ってくる。即ち或る内容を以て既に前提されている人間能力が、純粋な更に事実的な自然科学の客観的妥当性を理解せしめる様に構成し直されている。(VII 401)

註　神話的について (VI 117, 209)

ここから先験的心理学が生ずる。先験的心理学とは、元来心も自然と共に超越として括弧に入れられるべきものであるにも拘らず、かゝる心の中に於て超越の構成を説こうとするものである。[註1] カントは当時の経験主義や合理主義と同様に心理主義に陥入り、而して合理主義を批判しようとし乍ら、自らも誤れる合理主義（知性自身の説）に陥入つた。[註2] 真の合理性とは、[註3] 純粋意識に於ける本質直観の下に於ける純粋明証に基礎づけられるものである。

註1　先験心理学については、(VII 380)。その他「デカルト的冥想録」に於て強く否定されたが、(I 43, 183－4)「危機」に於て一つの解釈の下に許容される。(VI 261)

註2　合理主義との関係については、(VI 151 ff.)

註3　真の合理性について (VII 361)

従ってカントは真の明証を見失つた。蓋し彼はアプリオリを主観性の「しるし」と解するが、しかも外からの感覚によつて触発されない限りの主観性に於ける「しるし」と解するからである。これが正に先験心理学的な（誤れる）構成 (Konstruktion) であって、真のアプリオリは事実に無関係である。(VII 402)

3　アプリオリ及びアプリオリな判断の真の意味

我々は次の事を記述的に見出す。即ち多くの判断は普遍的な事態を意味思向する。但しその意味思向の中には個々の事実の現実性の措定は少しも含まれていない。而してこの判断の真理が洞見に於て明示されゝば、即ちその普遍的事態が直観的に完全な自己所与に齎らされる様な意識に於て明示されるならば、我々はこの事態を先天的事態と名づける。それに洞見的に対応する判断が先天的判断であり、心理的判断と区別して本質判断ともいう。この事態及び判断には分析的と綜合的とあるが、何れも無制約的普遍性を以て妥当する。それ故アプリオリを否定することは誤りであるばかりでなく、不合理であり、不可能である。然るにカントは論理主義的合理主義の偏見に基づき一種の不合理即ち形式論理的矛盾、分析的矛盾の不合理のみを知つていた。かくてカントはあらゆる真の意味での綜合的アプリオリは、あらゆる分析的アプリオリと同様に、その否定によつて不合理の生ずるといふことを見逃した。即ちカントによつて先天的綜合判断は、本質的な普遍性と必然性ではなくして、特に人間的な妥当の必然性を示すのである。

カントは人間主義を強調し、例へば次の様に解している。我々人間にとつて、即ち感性を与えられ、感性的触発の質料を不可避的に時間と空間との形式の中に秩序づけなければならぬ所の我々人間にとつて、純粋幾何学は妥当する。しかし幾何学は絶対にあらゆる純粋主観一般に対して妥当するものではない。このことは全純粋数学及び純粋算術についても同様であると。(註)

註　幾何学について (VII 360)

この事は根本的に誤りであり、先天性に関しては、かゝる判断の適用ということは全く問題とならないのであ

る。

この事は範疇や原則に関しても同様である。

要するにカントは二つの合理性を事実性に還元して、真の合理性を根本的に拒否したことになるのであつて、ヒュームと大差ないのである。(VII 403)

三　長所　カントの先駆的意味

しかし幸にもカントの理論は、カント自身が知るよりも一層よいものであり、又幸にも広い範囲に於て、彼の洞見と思惟必然性とは、カント自身がそれを理解する以上に真実のものである。我々が問題の導入仕方と問題のカント的解釈とをいかに決定的に拒絶しなければならなくとも、強力な多くの発見がカントの哲学に含まれている。その発見は研究の分肢構造の中にある。即ち先づ先験的感性論と先験的分析論との区分、或は先験的分析論の理念に於て(註1)——たとへその理念が完全な方法論的純化にまで達し得ないとはいえ——而して次に就中先験的分析論の中に即ち綜合による自然構成の学説に於て、しかも更に戻つて感性論分析論弁証論の区別に於てある。(註2)

註1　主観性の考察のことと思われる。

註2　I 173 及び「経験と判断」の各節の区分仕方参照。尚弁証論については VII 224, 360 特に 400 に於て触れている。

その一つを摘出すれば、カントは意識の中に層をなして構成される志向性に遭遇した。その志向性に於て外的対象性が経験し思惟する意識に対する対象性となるのである。但し彼にとつてそれが主題とならなかつた。(註)

註　志向性について、VII 386, 387

更にそこに綜合の行われることを発見した。その事は単に感覚与件がいまだ認識でないことを指摘するのみならず、綜合が階層的な分肢構造を指示している所にも意義がある。而してそれは全体学に対する芽生えとなるべき使命を有する理論的端初である。勿論そのためには現象学的還元と現象学的本質的見方と神話の排除とが必要である。

しかし綜合が直観的統一にも属すること、而してあらゆる内在的対象の統一に綜合が属することを見逃した。(註1) 但しカントは追加的にそれを妥当とし、従つて先験的感性論への矛盾を自ら引き起したのである。(註2) (VII 404)

註1　綜合について、「デカルト的冥想録」第十七・八節参照。(I 77 ff.) 感性と悟性との関係について (VII 224)

註2　カント「純粋理性批判」(第一版) 分析論二六節 (第二版一六〇—一頁) 参照。

要するにカントの偉大なのは、その理論にあるのではなくして、その具体的な洞見と、直観内部に於て体系的に採り出されたものとの豊富さにある。

それ故カントも我々の歴史的理念史的図式の中に秩序づけられる。即ちカントに於て始めて自然の現象学への傾向と、自然認識の理論への傾向が発生した。但しその自然認識の理論は、空虚な普遍性に固執せず、意識とその現象とに於て明示され得る綜合の層を追求するものである。しかしかゝる綜合の層をその本質内容と関聯とに関して現象学的に研究するといふことはカントに思いつかなかつた。しかしカントが最初の人として偉大な構造を洞見した限り、彼は新しい現象学への一つの移行項をなすものである。(VII 405)

さて本論文に於ては、前論文に於て控え目であつたカントの寄与に関し、固より制限つきではあるが、一層積極的にその役割を認めているといつていいであろう。それは従来のカント学説の表面的理解から、その方法論的考察

により、カントの意図の理解にまで深められたことに基づくのであろう。(註)

註　「イデーン」(III 148)

そこで本論文に於て概括した上、更に進んで次の論文で方法の問題を論じている。但し前論文が立場それ自身に関する方法であつたのに対し、次の論文では手続としての方法の問題が採り上げられていると言つてもいいであろう。勿論両者の間には密接な関係がある。

(未完)